

令和7年度第5回社会教育委員の会議

令和7年11月13日(木)

午前10時00分開会

開催日時	令和7年11月13日	開会10時00分 閉会11時30分	
場 所	小金井市役所第二庁舎8階 801会議室		
出席委員	議 長 笹井 宏益 副 議 長 金澤 大恵 委 員 新井 しのぶ 委 員 藤森 光一 委 員 北澤 隆司	委 員 渡邊 ふき子 委 員 伊丹 文男 委 員 小林 浩 委 員 鈴木 哲也 委 員 池田 佳代	
説明のため出席した者の職氏名	生涯学習部長 平野 純也 生涯学習課長 濱松 俊彦	図書館長 三浦 真 公民館長 鈴木 茂哉	
事務局	生涯学習係長 最所 拓也		
傍聴者人数	0人		

日程	議 題	
第 1	議 題	(1) 令和 7 年度東京都市町村社会教育委員連絡協議 会交流大会・社会教育委員研修会について (2) (仮称)第 5 次生涯学習推進計画策定について  (3) その他

笹井議長 皆さんおはようございます。定刻になりましたので、令和7年度第5回社会教育委員の会議を始めさせていただきます。金澤委員と鈴木委員からは連絡がございませんので、途中でこちらにいらっしゃるのではないかと思います。本日、策定支援業者がオンライン参加をさせていただいております。よろしくお願いいたします。

まず事務局より資料の説明をお願いいたします。

最所生涯学習係長 事務局です。

お手元に月間公民館11月号を配布しております。その他には次第、資料1と資料2、計画の本文というところで、こちらを用意しております。また、参考に標語の例ということでご用意しております。途中で資料の過不足等ございましたら、お申しつけいただければと思います。

以上です。

笹井議長 それでは議題に沿って進めたいと思います。議題の(1)令和7年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会交流大会・社会教育委員研修会についてであります。

事務局からご説明をお願いいたします。

最所生涯学習係長 資料1をお配りしております。日程等をお伝えさせていただいているとおり、令和7年12月13日、土曜日に宮地楽器ホールにて交流大会・社会教育委員研修会を実施いたします。内容につきましては、式典から始まりまして、第2部に先日11月9日に調布市のブロックのほうの研修会があったと思うのですが、そちらを含めた形で、各ブロックから研修会における報告ということで1時間ほど報告会があります。休憩を挟みまして、第3部という形で幹事市の小金井のほうから、こちらにあるテーマに沿って事例紹介、パネルディスカッションというような形で笹井議長中心に進めていきたいというところになります。よろしくお願いいたします。具体的に何か役割があるのかというところでは、基本的に想定はしてないのですが、皆さん一緒に頑張っていきましょうというところで、

改めて私のほうからご説明という形になります。

事務局からは以上です。

議長のほうから何かあれば、補足でご説明いただければと思います。

笹井議長 当日、実は後半の第3部は全員小金井の関係者となっていて、実践者の人を集めてやろうかという話になっています。今現行のメンバーからは小林さんをお願いをしております。それは相談をさせていただくことにはなりますが、他の委員の皆様も例えば特別にやることがあるのでしょうか。

最所生涯学習係長 受付等事務的なものについては事務局のほうで対応しようと思っています。当日は最前席に座っていただいて、第3部のところでやり取りがあれば、そこは参加していただきたいと思います。特段そういうことは今想定していません。

笹井議長 わかりました。そのようなことですので、一応話を聞いていただいて、もし質問等があれば質問していただく形になります。

金澤副議長 席は決まっておりますのでしょうか。

最所生涯学習係長 席は出欠の状況を見ながら、大体のところは決めておきます。登壇者の方を最前列にしようかと思っています。そのような形でお願いいたします。

笹井議長 事務的な話ですが、パワーポイントを使って説明をいたしたいと思うのですが、そのご準備はよろしいですか。

最所生涯学習係長 事務的にどこに誰が座るのか、パワーポイント等々活用するということは、会議が終わった後にお時間をいただければ、そちらを調整したいと思います。よろしく願いいたします。

笹井議長 配布資料や、登壇者の人の資料というのは事前配付していただけるわけですね。

最所生涯学習係長 受付で登壇者の方への配布は可能だと思っています。資料の量が多くなってしまうと印刷するのも大変です。チラシは作成予定です。

笹井議長 この件に関してご質問等ございましたらお願いします。よろしいでしょうか。ありがとうございます。では、そのような形で進めさせていただきたいと思います。

それでは今日の本題になります。第5次の生涯学習推進計画の素案が配られています。事務局から説明をお願いします。

最所生涯学習係長 生涯学習推進計画ということになります。前回、10月9日の会議で施策の体系図等、また、キャッチフレーズである標語についてご意見をいただいたところであります。また、小委員会では10月21日、11月4日に会議を開催いたしまして、本計画の第1章から第5章まで賛同していただいております。特に本計画の中心的内容である第4章「施策の展開」について議論を重ねてまいりました。今回は今までご議論いただきました内容を踏まえて、更に1章から5章の計画というところを素案として作成いたしました。これをもってパブリックコメントに諮りたいというところの資料を現在作成したところであります。

計画の説明になります。今回、第5次生涯学習推進計画につきましては、教育基本法の第3条にあります、あらゆる機会にあらゆる場所において学習できること、またその成果を活かせる社会の実現ということがテーマになっております。これを中心に構成をしております。また前回の会議の中でありました、小金井らしさとはどのような点をご議論いただければと思っております。1つは「みどり」というところですが、そちらをテーマとして「みどり」にちなんだ事業を計画の中にいくつか取り込んでございます。また、高等教育機関、大学等が市内に点在するといった好立地であるということも小金井市の1つの特徴だと考えております。大学との連携を推進していくといった内容を計画の中に取り込んでいるという形になっております。

資料を見ていただくと、まだ目次等はないのですが、今回の第5次の計画について、基本的な章立て、構成については、前回の第4次と同じになっております。第1章から始まりまして「計画の趣旨」、

第2章は「生涯学習を取り巻く動向」、第3条は「計画の基本方針」、第4章は「施策の展開」、第5章は「計画の推進」という形になってございます。

1 ページ目をご覧ください。まず第1章です。第1章の「計画の策定にあたって」というところでは、計画の趣旨、計画の位置づけ等を記載しております。今回、第5次の策定にあたっては、市の最上位計画である基本構想との整合性はもちろん、今年度改訂を進めております教育委員会における基本目標、基本方針、また市長部局で策定をしております教育大綱をはじめ、同時期に策定しております第4次小金井市教育プランなど、各種いろいろな計画の整合性を図って策定をいたしております。

4 ページをご覧ください。第2章について、ここでは国、東京都、小金井市の近年の生涯学習を取り巻く状況の他、社会教育施設の利用状況であったり、小中高校生にアンケートを実施したので、アンケートの内容をもって結果を記載しております。また、第4次の計画の振り返りということで、第32期、前期の委員の方々にまとめていただいた内容は、第4次の評価に記載をしております。

18 ページをご覧ください。第3章は、これまで議論いただいた施策の体系図をはじめ、基本方針等の記載をしております。

続きまして、21 ページをご覧ください。ここでは計画の推進的な内容となる「施策の展開」ということで、市がどのような事業をどのような考え方で推進していくのかというところを記載した章となっております。

第3章「施策の体系図」をもとに、それぞれの現状、課題、方向性、市が実施している事業を体制化して、第4章「施策の展開」ということでまとめてございます。

この間の小委員会のほうでは、主に第4章についていろいろご意見をいただいております。直近の委員会で意見を反映したものが今現時点でこちらの計画なっておりますので、本日は第4章のほうを中心にご意見を賜りたいと思っております。

資料の38 ページ、第5章「計画の推進」では、第5次の評価するための指標について記載しております。指標については、本来1つの大きな目標として、毎年行っております世論調査の内容の質問事項であります「直近1年間で生涯学習を実践したことがある市民の割合」というところを大きな目標としてございます。本計画が推進

した暁には、より多くの市民の方が生涯学習を実践していくという  
ようなこととなり得るように、そのために本計画の定める各事業を  
実施していくということになっております。事業ごとには数値目標  
を定めており、事業ごとに数値の進捗を図っていくということになり  
ます。指標については、現時点では数値目標を前提とした定量的  
なものとなっておりますが、定性的なもの、例えばアンケートで  
市民の満足度等、様々な指標についてまだ検討の余地があると思  
っておりますので、ご意見いただければと思います。

ここまで、簡単ではございますが、本計画の素案として説明をさ  
せていただきました。

この後、今日のご意見等を反映しまして、後日開催予定の小委員  
会でご議論いただいた後、庁内の検討委員会、また教育委員会での  
審議を経まして、パブリックコメントの実施という形で予定をして  
おります。

説明は以上となります。

笹井議長

ありがとうございました。

小委員会では議論していただいたのですが、親委員会のメンバー  
では十分中身について精査していない方もいらっしゃると思いま  
す。復習の意味で、まず第3章から簡単に説明をしていきたいと思  
います。

第3章のポイントです。20ページになります。大きな基本方針、  
基本理念みたいなものがあり、施策として3本の柱が立っています。  
どういう柱を立てるかというのは、その自治体のご判断になると思  
いますが、小金井としては3本柱で、1番目は「みんなが楽しく学  
べる場や機会の充実」、2番目が「学びを活かし地域をつなぐ仕組  
みや仕掛けの支援」、3番目は「学びとつながりを支える基盤の整  
備」となります。1番目「みんなが楽しく学べる場や機会の充実」  
は、行政ももっと頑張っているいろいろな事業を展開してイベントをや  
っていくのと同時に、市民向けのメッセージでもあるわけです。皆  
さんが楽しく学べる場や機会というものをいろいろな形でつくっ  
ていきたいと思いますという、官と民、両方視野に置いてぜひ協力して  
くださいというメッセージだと思っています。だから1番目の柱立て  
というのは、行政の施策に限らず、民においてもこういうことが望  
ましいですよねということを含めて言っているようなところにな

と思います。2番目と3番目は、むしろ施策レベルの行政の話です。仕組みの制度、仕掛け、事業や施策になります。そういうものをどのようにつくっていくかということで、対行政ということのを念頭に置いてつくられた柱立てです。3番目はもちろん基盤整備なので、行政が学びのインフラとして何をどうしたらよいか、何をすべきかという構成になっております。具体的にという点になると、1番目の「みんなが楽しく学べる場や機会の充実」の(1)(2)(3)に整理されています。2番目の行政に何を求めるか、どういう制度や仕掛け、事業が必要かという点で(1)(2)(3)があります。3番目は基盤整備で、基盤としては施設の話と、これからはICTの時代なので情報基盤の話と2つに整理しています。実は中身は最大の議論になりますが、21ページが第4章として「施策の展開」で、どういう事業、施策が必要になるのかということが書かれています。1番目の施策1の(1)が、この20ページから23ページ、それから(2)が24、25ページ、3番目が26、27ページになります。全部読むのは大変なので、第4章の「施策の展開」の1番目、2番目、3番目、つまり21ページから27ページまでについて、ご意見ございましたらおっしゃっていただきたいと思います。

小林委員

21ページの「子ども・青少年の学びの場や機会の充実」のところで、「子どもたちの居場所の拡充に努めます」と入れていただいたことはありがたいと思っています。しかし、これが後ろのどこに反映されているのかがわかりません。放課後子ども教室のことを念頭に言っているのかもしれませんが、居場所づくりは放課後子ども教室だけではなく、いろいろなことをやっているはずで、例えば、子育て・子育てネットワークは「えにえに」を出しておきまして、子どもの居場所としてこういうものがあると紹介をしています。そういったものも含めた形での居場所づくりだと思いますので、若干福祉とも重なるところがあるかもしれませんが、安心してそういう形の居場所から何か学びといったものが発するわけです。例えば公民館も居場所づくりの一環かもしれませんが、どこが居場所なのかを意識して書いていただきたいところがあります。なかなか書きづらいのかもしれませんが、ここに書いてだけで後ろのほうで居場所づくりについての言及がない感じがするので、もう少し頑張ってい

ただければと思っています。この文章はすごくよい文章だと思っているので、これをちゃんと落とし込んだ上で展開ということかという気はしております。

笹井議長            今のご意見は、現状と課題の認識を変えて、方向性のところでそのような取組や施策は大事ですというように書いてほしいということによろしいですか。

小林委員            そういうことです。第4次の評価のところも、こういうことをしました、こういうことをしましたと言って、じゃあ残課題としてできたこと、できなかったことは書いていません。結局できなかったことについての課題については、前回の32期の教育委員の意見が書かれてあっただけで、これについてどう考えるのかということの受け止めもありませんでした。行政としては書きづらいのかもしれませんが、コロナもありましたし、市民の地域社会への関心の薄れといったこともありますので、そういったことも含めた上で、こういうことやったけれど、結果としてこういうところがなかなかやり切れなかったという形でもよいですし、もしくはまだこれからやっていないといけないということは後ろのほうでは書いてあるのですが、いわゆる総括というか、振り返りが甘いと思っています。例えば評価をやってくださいと言うのであれば、それは第4次でやっていきますとか、目標と評価はしっかり書いたほうがよいです。言質を取られないようにするのが行政の皆さんかもしれませんが、ここは言質をして、社会教育をいろいろやっている部署にも、こう書いてしまったから仕方がないからやってくださいという形で、やらなければならないよねという意識を高めるためにも、そのように書いたほうがよいのではないかと思います。これは21ページからの話ではありませんが、第4次の振り返りができなかったこともしっかり認識して、ちゃんと書き、だから第5次でこれをやるというロジックだと思うのですが、その関連性がすごく薄いです。前回の3次、4次のときもそうでした。4次に対する総括というものをしっかりやってほしいと思いました。

笹井議長            具体的にどこをどう書くかというのは検討させていただいて、また小委員会でも対応したいと思っています。

事務局、何かありますか。

最所生涯学習係長 32期の皆様のほうにご意見いただいたというところで、その課題については17ページで記載をさせていただいております。先ほど、小林委員からご指摘ありましたとおり、そのアンサーというようところが書きづらい部分もあるかもしれませんが、内容について再度精査をして、できる限り書いていきたいと思っております。ちなみに指標については、先ほど私から申し上げたとおり、認識をしております、ロジックが難しいです。これが上がったから推進されたというようところの難しさは認識をしておりますので、第5章のほうで少しそちらの整理をさせていただくというところと、進捗に関しては、令和8年度の評価は、令和9年度に行うということになるのですが、今まであった事業を200事業くらいまとめて出して、これで進捗を図っていくということではなく、こちらでも少し出し方については工夫しまして対応していきたいと考えているところです。その書きぶりについては検討させていただきまします。よろしくお願ひします。以上です。

笹井議長

生涯学習施策の事業の評価は難しいです。税金で動かしている以上、何らかの評価が必要なのは十分わかります。例えば、学校教育における授業の評価というのは、子どもによって受け止め方も全然違いますし、その効果がいつ出るかというタイミングの問題もありますし、どこまで彼、彼女が理解したのかということもございまして、評価というのはかなり難しいです。それが生涯学習ということで結構多くの分野で広がるとなかなか難しい面があります。そこについてはいろいろ工夫していただいて対応させていただきたいと思ひます。ありがとうございます。

他にどうでしょうか

池田委員

小林委員の評価と似ているかもしれませんが、実際に放課後や地域未来塾などをやって問題が生じたときに、昨年度こういう問題がありました、じゃあ解決するにはというような。実際やっけていて人員が足りないけれど、どうやって人を集めたらよいのか、その問題を誰に話してよいのかもわかりません。そういうところを私たちがだけではなく、他の活動している方も小さいけれど問題が生じたとき

に、それも載せていただけるとありがたいと思います。

笹井議長           それはどのように補足するのか、把握するのか。

池田委員           その評価の一環として、こういう問題がありました、じゃあそれを解決するには、ちょっと具体的にはわかりませんが、小林委員のおっしゃっていることと被っていると思います。

小林委員           根っこの部分は同じだと思います。ただ、どう表現するかというところが難しいところがあります。評価の話しでよいのであれば、例えば、これは延べ人数でやっていて、今まで延べ人数でやっているから学校の中で10人の子が毎回参加していると、延べ人数としては何人とか何百人という形になるのですが、実は学校の中で10人しか利用していないということもあります。カバー率としては実はとんでもなく少ないわけです。そうすると税金を払っているのだから、そこはカバー率みたいなところ、1回でもいいからいったことがある接触率のようなものでやったほうが本当はよいのではないかという議論もあります。今まで述べ人数でしか取っていないから評価のしようがないと言うのですが、逆に1回でもいいから参加したことがありますかとか、ありませんかというところで本当は評価したほうがよいのではないかというところがあります。そういうことで言うと、なぜ小中学生にこのような取り方をしたのかよくわからないのですが、「参加したいですか」という意欲だけ聞いていますよね。本当にそれでいいのか、本当は「参加したことがありますか」という事実から入ったほうがよいはずなのに、なぜ意欲からアンケート取るのだろうかと疑問に思っています。事実から取ったほうがよいのではないかということも、後で言おうと思っていました。東京都平均で前の統計ですが、地域のイベントに参加したことがないという子が、東京都より平均が低いです。学年の学力調査をやるときに一度取っているのですが、そういう事実がまったく表に出てこなくて「やりたいですか」「やりたくないですか」とあり、忙しい塾にいつているから、いきたいけどいけないという子どもの部分でいうと、ちょっと違うのではないかと思ったりします。そういうことも含めて、どうやったら今の課題が浮き彫りになるような指標になるのかということを考えないといけないと思います。

笹井議長

例えば、文化事業などで芸術文化など、ベートーベンなどの有名なコンサートをすれば人はたくさん集まります。ところが現代音楽となるとほとんど人が集まりません。じゃあ現代音楽の演奏会をやらなくてもいいのですかという話です。つまり人気力です。参加する人が多ければよい事業で、参加する人が少なければあまりよくない事業なのかという評価の仕方です。人間の内面に関わる、教育や文化に関わるものの指標化が非常に難しいです。一部の人がついていけないような授業を学校がやっていて、それでも多くの人がついていけるのならそれでいいじゃないかという話でもないわけです。

小林委員

それはそう思います。

笹井議長

ですから、参加の人数などで指標化をすることはとても難しいことです。

小林委員

そうすると満足度や1回でもちゃんと広がったかとか、そういう指標で見たほうがよいのではないかと思います。社会教育に参加したことがありますか、ありませんか、例えば地域のイベントや行事にボランティアで参加するなど、触れたことがありますかという、まず接触があって、それについて満足度はありますかという形で聞くことはできませんか。僕は市民アンケートの形で取るのが本当はよいと思っています。延べ人数でやることは本質的ではないということも32期のときにも言ったのですが、そういうことだと思います。まだ指標が延べ人数になっているので、再検討してほしいと思います。質をまず評価したいです。質をやるには満足度や社会教育は広がりが必要だと考えると、そういうことなのではないかと思えます。そういうことから議論を始めていけないといけないのではないかと思います。今回は突貫工事なので、その議論をしている暇がないからこうなってしまったので仕方がないと僕も思っています。ただ、これではだめですよということだけは言いたいです。これでは質が図れません。池田委員が言いたいことも同じだと思います。問題点があるから結果としてその指標が悪くなっている。悪くなっているなら、じゃあどうやったら問題を解決していけばいいのかということなので、その問題点の把握や特定は認識されない

と改善に向かいません。結局一部の人が言っているだけだといって大体蹴られてしまいます。そういった意味では、そういうものが露わになったり、客観的に見えるものをちゃんとやった上で、例えばですが課長は議会で答弁が大変でしょうけれど、そういったことも覚悟しながらやっていく、そう言われているのだからやりましようと言って推進していくのが、内部監査をわざとごまかさないで問題を言われて、内部監査で言われたからやるしかないよねと今まで動かなかったものを動かすというやり方を僕もしていますが、そういうことなのではないですか。生涯学習はそこまで追い込まれている状況だと思います。

笹井議長 予算を取るためにわざと悪い結果を出して、予算がなければできないということをやっているという感じですか。

小林委員 かなり露骨ですが、でもそうやって市民の方に課題を認識してもらおうということは大事です。ごまかさないでちゃんと正直に頑張ったけれどここまでしかできませんでしたとか、これは予算の問題もあるでしょうし、市民の参加もあるでしょうし、ひょっとしたら教育の問題もあるかもしれなせん。そういったことがあるから、じゃあ第5次でこうやっていきましょうということだと思います。第4次での総括が足りないというのはそういうことだと思います。

笹井議長 よくわかります。ただ、あらゆる事業について、あらゆる施策、取組について、それぞれの人の課題認識は違うと思いますが、一般的なものを取り出して課題として提示して、それについての対応の方向、対応の方向もいろいろとあると思いますが、それは網羅的にはできないと思います。だから主なものというか、市民生活に影響が大きいものについては深く入っていくことも必要なのかと思います。

小林委員 前回もお話をしていましたが、一部の人がやっていて高齢化で新しく人が入ってこないとか、いわゆる市民の方の関心が薄れている、参加が少なくなっている、子どもたちも忙しくて地域に出られないという共通の認識があると思います。その辺が共通であれば、その辺から見てもらうということもありかもしれません。関心が薄

れているところで、生涯学習にもっと関心をという部分や興味を持ってもらったり、ちょっとやってみようという意欲が薄れているので、そういったところは課題感としてあるのではないかという気がします。これは小金井市だけではなく、都市部の共通の認識だと思います。それに対してどうしたらよいのかということは考えなければなりません。第5次ではこれが正解かどうかわからないけれど、とりあえずこういうことが必要だということを言った上で、じゃあチャレンジして、できた、できないということをやりながら前に進んでいくのが施策だと思います。第4次もそういった形で振り返ってみる必要があるし、第5次に向かっては文章に関してはとてもよいことが書いてあります。認識はあると読み取れるのですが、そこをもっと明確にやったほうがよいと思います。それを踏まえて書いているのですよね。

笹井議長

他にご意見はございませんか。

渡邊委員

参加する対象者が減っていることも1つはあると思います。前にも申し上げましたが、定年になって社会に戻ってくる団塊の世代の人たちが、例えば公民館事業の中心になるような年代の人はすごく活発で活気があって、それが今段々80代になり高齢化してきていて、積極的に活動する方が少なくなっているのと、新しく入ってくる方が少なくなっていることを感じています。これはシニアの話をしてしていますが、私は最近時間ができたのでいろいろやろうと思ってさくら体操の指導員の研修を受けたり、公民館の事業でも面白そうな事業に申し込んだりしています。そうすると、さくら体操のときにきていた方が、また次の公民館事業のときにもきていらっやって、私の住まいは緑町ですし、その方は男性で南側の方だと思のですが、ここにもあそこにも参加されているということは、興味を持って参加しようと思っている人は時間があればたくさんいらっやると思っています。工夫をしていくことによって参加する方はいらっやるはずだと思っています。魅力あるイベントや、皆さんが興味をそそるような内容のものを工夫しながらやっやいていく、そのためには今興味のある方たちの年齢的なものもありますし、かつてやっやっていた方が高齢化されていたりするので、現役世代でそこに携わる方や、いっやみようかと思っや方を増やしてくとい

うことはとても大事だと思っています。いってみたいと思っているけれどなかなか一歩踏み出せない方々が、どんどん入ってくれるようなイベントの雰囲気づくり、広がりを考えていくとか、後は広報をするということで、それはもう施策の中にずっと入ってはいるのですが、今までとは違ったアプローチみたいなことができるようになって、いってみようと心が動くかと思えますし、それによって出かけようと思う方はたくさんいらっしゃるのではないかと思います。現役の間はなかなか時間がなくて動けなくて、また子どもたちもいろいろな習い事をやっていたりして、その子その子ではなかなか全部は出られないけれど、ここだけはいってみたいと思うような、そういうイベントを多くの方に知らせて、ウェルカムという雰囲気迎え入れるような体制づくりができればよいです。具体的ではないのですが、そういう意味では小林さんのおっしゃっている居場所づくりは、今すごく必要になってきているので、担当としては他のところでやっていることもあるかもしれませんが、生涯学習の分野として、小さなお子さんから100歳まで、その方々をすべて包含するような計画をつくっていく中で、ここにはこういうものがあるということを知らせていくような書き方ができればと思います。去年の調査と今年の調査とを比べるには、ある程度項目も同じにしなければいけないと思うのですが、そういった工夫みたいものが入ってくると新しい計画をつくっていくこととしてはよいのではないかと思います。具体的ではなく申し訳ないのですが、そのような書き方をしていただく部分があってもよいのではないかと思います。学校にいけない子たちにはたくさん居場所がありますよということを知らせて、必ずあなたの興味、関心にマッチする場所がありますよというように、それを小さなお子さんから高齢者までの生涯学習の中で知らせてあげられるような書き方ができるところがあってもよいと思います。

笹井議長

居場所の問題は、社会参加の問題と、その場に参加するという問題と、マインドセットの問題と、いくつか場面があります。極めて重要な課題になっているのは、日本全国どこでもそうなのですが、どの世代も男だけではなく若者もそうですし、子育て中のお母さんもそうですし、高齢者の人も、パートナーが亡くなった方も、居場所がないということです。今思ったのは21ページのところに現状

と課題の話、それと方向性のところで、今渡邊委員がおっしゃっていただいたことを丁寧に書く、課題の所在がわかるように書いて、それについて場への参加を促すような取組や、意欲を高めるような取組が必要になっていますよねということを書いていくようにしたらどうかと思います。ただ居場所の問題というのは参加の問題やマインドセットの問題というのは事業化しづらいというところがあります。形にならない、なっていないからどういうふうにすればどうなるというのがよくわからないので事業化しづらい面があります。そういう意味では工夫も必要なのですが、どこをどうするかという面があるので、行政の施策としても基本的に工夫をすることは必要だと思いますが、もっと市民レベルで、市民が市民目線でつくった居場所にみんなが参加できるような形でやるというのは必要かと思います。行政だとどうしても敷居が高くなってしまいますので、そういうことは必要かと思います。先ほど申し上げたように、第4章の1番目の施策の方向のところは、官民合わせてこういうことが大事ですよということ、行政もちろん頑張ってもらってほしいけれど、市民レベルで居場所をつくり広げていくということがとても大事なのではないかという書きぶりをつなげたらよいのではないかと思います。事務局のほうで検討していただくようにしたいと思います。また小委員会でお示しをしたいと思います。

小林委員

補足で情報なのですが、先週末、子育て・子育てネットワークの小金井子どもメッセというのがあり、趣旨が地域で子育て団体や、子どもの居場所をつくっている人たち、駄菓子屋、それから子ども食堂、福祉の福祉コーディネーターや、学校のカウンセラー、いろいろな多種多様な人たちが集まって地域でつながろうということをやりました。みんなでお知り合いになってやりました。今見たら「NPOとのつながりの推進」とあって、子育て・子育てネットは完全に無視されていますが、社会教育的なことをやっています。そういったものを反映して入れたほうがよいと思いました。子育て支援課の鈴木さんです。取材してもよいのではないのでしょうか。生涯学習課とも連携して、こういうものをちゃんと入れてくださいという話をしますということは鈴木さんにも言いました。居場所づくりも全部は行政はやっていません。子育てネットワークがやっていません。みんなに声をかけて、自主的にやっている人たちを集めて、や



性を感じながらも」では、子どもはその学校外の学びは大事だとは具体的に何のことだろうと思います。大人からするとこう感じているよねと思っていると思うのですが、実際はそんなことはなく、子どもは学びたいことを行政や地域に関係なく、オンライン上で学んでいます。邪魔するのはどちらか言うと親や大人です。学びの場はあります。ただやってはいけないと言われ、制限時間や見守りスイッチが入っているという感じです。これは合っていないのではないかと思います。結局、その後の働く世代はよいのですが、高齢者、障がいのある方、健康、体力、交通、デジタル環境の制約で生涯学習への参加が難しいと書いてあるのですが、健康面やデジタル環境の制約で難しいのではなく、例えば高齢者が初心者から始める講座などありますよね。料理講座、ギター講座など、今までやったことがないものを高齢者になって急に始めるのはハードルが高いと思います。健康面やデジタル面とかではなく、やはり大人になってから初めてのことをやるのは難しいです。生涯学習というのは、昔はそういうものだったのかもしれませんが、今は単純に会社を辞めて定年退職した後に、知り合いがいなくて知り合いになりたいのだけれど、近所のラジオ体操とかおしゃべりする会、ご飯を食べにきませんかみたいなものだったら、ちょっと面白そうだからきましたという感じで入れます。それが初心者向けのギター講座になると、そこにいってもう上手い人がいたり、上手くならなかったらどうしようかと悩んで結局いかなくなります。この生涯学習という言葉自体がリスキリングとか、いろいろな新しい技術を身につけるハードルの高いものになります。そういうものを充実させましょうといったことではなく、居場所や単純に何か食べてつながれるとか、おしゃべりでつながれるとか、行政に求められるのはそのぐらい敷居が低いものだと思います。そういったものを施策として展開していくほうが正しいのではないかと思います。尖ったものに関しては大体みんな個人でやっています。僕も子ども支援をやりたいと自分で事業を立ち上げているくらいですし、つながりたい子集まれと言ったらお金を払ってでも集まってくるので、それは行政に期待していません。まず、孤立している人を救うのであれば、そんなに尖ってなくてよいと思っています。現状と課題は僕が思っている現状と課題と何か違います。「人生100年時代を楽しむ」とありますが、楽しむことではなく、孤立を防ぐとか、つながるとか、浅く広くつ

ながら、つながった後につながつたもの同士ちょっとこれやってみたいんだけどみたいな感じで学びに行くのだと思います。その学びの前に、つながるための何かのほうがお金がかからなくて、行政にやってほしいことなのではないかと思います。ただ、それが事業化しにくいという話なのですよね。それはわかっています。今、行政に求められることはそちら側ではないかと思います。

小林委員

方向性のところかと思っています。学びの理由づけ、参加の理由づけみたいなものが、簡単なものや受け入れやすいものだと参加しやすいですよね。ギターを学びましょうというところとちょっと無理という感じになりますが、ご飯を食べましょうとか、おしゃべりしましょうだとつながりやすいです。体を動かすのもそうです。焚火を囲みませんかというものもありましたよね。そこから学びにつながっていくので、行政が難しいのであれば、NPOや民間の知恵を活かしてという文言も書いて、これまでにないアプローチで参加しやすい環境をつくっていくとか、つながりやすい環境を醸成していくとか、そういう場づくりをやっていくということを方向性に入れるといった感じです。藤森さんがおっしゃったことも同じですよ。

藤森委員

「みどりを楽しむ」とあると、何だろそれいってみようかとなります。

伊丹委員

記憶が定かではないのですが、数日前の市民報だったかで、高齢者のスマホを6人集めればお伺いしますというような、小さなコメントが出ていました。これはいいな、面白いなと思ったのですが、6人というのはなんだろうと思いました。私はそれなりにスマホを使っているから別にいいかと思ったのですが、特に高齢者のスマホについては、今非常に問題が大きいのではないかと思います。皆さんはスマホを当たり前に使っていらっしゃるけれど、恥をお話しますとうちの家内は全然使えないという状況です。僕が教えるよと言っても、こんな小さいものを使えないということになってしまいます。うちの家内は編み物をやっているのですが、その検索するならスマホで検索すればと言うと、あなたちょっとパソコン立ち上げてと言われる。確かに私のパソコンは大きいデスクトップなので、その動画を見るほうがよいかもしれません。それは置いておいて、今回

のその6人というものは何なのだろうとふわっとした疑問を感じてしまいました。人数の問題なのか、あるいは65歳以上という年齢の問題なのか、よくわかりませんが、実際に65歳、70歳以上の特に女性は、スマホ教室が必然的に必要なのではないかという気がしています。最終的にはPRだろうと思います。藤森委員がおっしゃっていた中で、それをどうやって広くみんなに教えるという方法が難しいのか、お金がかかるのか、できないのか、その辺のところは気になりました。

池田委員

皆さんのご意見を伺ってつながっていると思ったのですが、やはり一番大事なのは、どんなによい内容をやっていても、それが世間に知らされない、アクセスできない、その現場にいけないということがあると意味がないと思います。情報にアクセスし、かつ、参加か否か、すぐ参加ができるシステムがあれば一番よいと思います。これいいなと思っても、応募の仕方が面倒では困るので、いいなと思ったらすぐ参加できるというものができればよいです。参加しないと笹井先生がおっしゃったマインドセットもつくられていきません。参加してみんなと交わってマインドセットを積み上げていくので、参加しないと意味がないと思います。伊丹委員がおっしゃっていたPRの仕方が、今の若い人たちと高齢者は違うと思います。高齢者のスマホが使えない人にはどうするのか、若い人たちは長い文章を読まないからパッとできるような、アプローチの仕方を変えないといけないとは思いました。

笹井議長

ありがとうございました。私は参加の場面と、参加というのとはつながるとのことだから、つながりやすさみたいなもので、マインドセットは何か学んでみようという話になると、ちょっと違うようで、でも実はつながっているんですね。

藤森委員

「みんなが楽しく学べる場」という話をしたのですが、自分の実体験ですが、仕事で西東京市の下保谷児童センターという、1階が高齢者向けの複合施設で施設長をしていたことがあります。コミュニティカフェでおにぎりカフェというのをやって、1ヶ月に1回、20合分のご飯を炊いておにぎりを握ります。誰でも食べにきてくださいと言うと200人ぐらい毎回食べにきます。200人ぐらい

食べていたときに、おにぎりを握ってくれるボランティアさんの中に、私は公民館でスマホ講座をやっているから、おにぎりを食べにきた人にやりたい人がいたら来週のおにぎりカフェに連れてきてよ、私教えるからと言って誘いました。スマホ講座というと、何月何日スマホ講座があって先生がそこにいくわけです。だから6人ぐらいきてくれないと開く意味がないです。でもおにぎりカフェにおにぎりを食べにきた人に、ついでにスマホを教えてあげるよと言われてたら、じゃあちょっと聞こうかなとなります。学びにおいでというのはハードルが高いので、ついでに学んでいく形が一番よいです。おにぎりカフェはただおにぎりだけ握れば200人もくるのだから、おにぎりを握りましょうと言って、お米をフードドライブでもらって、毎回20合炊いて、そうしたら民生委員さんたちがみんなお米をもらってきてくれるようになりました。西東京市の旭製菓さんというかりんとうの会社が、かりんとうの割れたものなら全部持って行っていいよと言ってくれたり、お漬物屋さんがおにぎりを握っているなら漬物を持って行っていいよと持ってきてくれたり、食べ物を集めると大体人が集まってきます。楽しく学べる場というのは、学びを提供しますと先に言うのではなく、最初に人を集めておいて、ついでに学べるけれど、やりたい人はいるかというのが本当は一番よいと思います。

金澤副議長

小さい頃の実体験ですが、いつも秋になったら町内の落ち葉を掃きました。誰が掃くかは決まっていなくて、皆で掃いて、一杯になったら燃やします。お芋があるからといって、ジャガイモやサツマイモを各自が自由に持ち寄り、焼いたりしました。そこで大人の人がコミュニティみたいに、お話したり、もちろん大人も子どもも一緒にいろいろな話をしたりしていたと思います。そのような近所で起きる楽しいできごとの記憶があります。ですが今はなんとなく高齢者と若者をわけてしまっている気がします。それは国の施策や例えば日本はSociety 5.0を推進していますし、全てがあらゆるルールと規制により物事が動くまたは動かすというプロセスがあります。私が今から言う意見はあまり意味がないかもしれないのですが、自然に集まって食べて、それで会話がつながって、本当にナチュラルな感じでできる仕掛けがあったほうがよいような気がしています。というのも現在は、何かこういうのがあって、その何か

きなればおばさん、おじさんとか、カテゴライズをあまりにもしすぎていると思うからです。

藤森委員

多分この議論が一番大事だと思います。この間、社会教育のイベントもありました。地域人材の活用というのですが、じゃあこういう人材がいるから、これを使って何かやろうとなったときに、個人情報壁の壁があります。だから落ち葉を集めて燃やすときについでに焼き芋も焼いちゃおうと言って集まってきた人の中に地域人材がいます。個人情報の壁などがありいろいろなものを破れないので、たまたまきて、たまたまつながったという形が一番よいです。

金澤副議長

人はフェイストゥフェイスだったら、その人の空気とか、そういうものを交換しているのではないかと思います。いい人だなとか素敵な人だなと思って知り合うことができたなら個人情報はあまり関係ないかもしれません。

笹井議長

本来は公民館がそういう施設ですね。図書館、博物館もそうです。本を借りて読むためのものが図書館だと思っっていますが違います。図書館が社会教育施設だった理由は、図書館にいて、みんなから刺激を受けて、あの人はあんな本を読んでいるのかとか、あんなこと言っていたなど、博物館も美術館も、見ているときに他の人が「綺麗よね」と話しているけれど、自分は全然いいと思わないなど、自分なりの受け止めを人とのつながりの中や接触の中で考えるものです。だから図書館は個人学習支援の施設でありながらも、社会教育施設というのはそういう意味です。公民館というのは、本来まず地域の人を低くして、みんなでつながる、しかも地域のつながりは斜めの関係ができやすいので何だってできるので、そこから新しい活動が生まれてきます。そういう場として公民館はあるのだけれど、目的になってしまったのですね。目的を掲げないと使わせてくれないといった形になってしまい、それが今の問題だと思っています。多目的ではなくて脱目的なのだと思います。目的などないのだけれど、ふらっと寄ってみたら面白い話をやっているというところが実は一番大事なのだと思います。できるだけ今おっしゃったようなことを、今の3つのところに書き込んでいきたいなと思いますが、施策化するのがすごく難しいです。だから施策化するなら、そ

ういう雰囲気の良い場をつくってあげるみたいなことになります。あとは市民の活動にいかに関わるかです。

小林委員 場はつくるけれど、公民館を汚すとか、あれはやるな、これはやるなという制約ばかり言われてしまうとなくなってしまいます。西東京の有名な館長さんが、公民館は汚してなんぼと言っていました。言い得て妙だと思いました。確かに市の財産なので、ちゃんと守ろうというのはよくわかるのですが、そういうことなのかなという気がします。

笹井議長 そうですね。私も仕事柄、公民館の調査にいったときに、あなたはこの団体の方ですかと言われて、団体ではなく調べにきましたと言うと使わせてはいけないと言われたこともあります。小金井ではない他の自治体です。こういう館長がいるというのは申し訳ないです。ちゃんと活動しているところもありますが、まだまだなところもあります。市の方はよくわかっていて、それを計画にどう落とししていくのか悩んではいます。社会教育委員会の提言や意見としてそれを施策化してもらおうというレベルの話であればそれはそれでよいのですが、5年間有効な計画としてそれをどのように書いていくのかというのは悩みどころなので考えさせていただきたいと思います。問題意識は皆さん共通しています。検討させていただきたいと思います。

それでは次に、2番目の「学びを活かして地域とつながる仕組みや仕掛けの支援」です。これも3つの具体的な項目があります。お気づきの点などあればさせていただきたいと思います。28ページから33ページです。

北澤委員 1番のところに、具体的な事業例として「手話講習会等」があります。25ページの「共生社会実現における学びの場や機会の充実」の文章を読むと「手話講習会等」というのは、こちらのほうが具体的な事業例としては適当ではないかと思います。もちろんこのボランティアのところの文章で手話講習会が出てくるのですが、どちらかという手話講習会の目的は、共生社会の実現における学びというところで、まさに本市においては平成30年に障がいのある人もない人もともに学びともに生きる社会を目指す小金井市条例と書

かれているように、そこに具体的な事例としてこちらが入るのかなと思っていたら、手話講習会がどこに入るのかと思って25ページを見たらなかったの、どこにあるのかなと思ったら28ページのところにあったので違和感があります。どうしてなのかと思います。こういう意味があるからここに置いたということがあるのであれば、教えていただきたいと思いました。

最所生涯学習係長 事務局です。手話講習会というところでご質問いただきました。共生社会の実現といったところで、大目的としては手話講習会というところなのですが、こちらは障がいのある方の理解教育といったところで、手話をする方も同時に学ぶというか、その辺りのニュアンスも含めて記載しました。こちらのほうは検討させていただきたいと思っております。

小林委員 その系統でいくと、多分あまりネタがないのではないかと思います。小金井市はすごく乏しいです。小金井子どもメッセは多分これに入ると思うので、子育て会に聞いてみて、そちらに入れ替えて、これは北澤さんのおっしゃるとおり、向こうに移したほうがよいと思います。もともと小金井市はこういうものが貧弱です。第4次するときも僕はパブリックコメントで言いましたが、ボランティア講座をやっているからいいでしょといった感じで逃げられてしまいました。多分ネタが少ないと思います。苦し紛れに入れたのかなと思います。違ったらすみません。表現が悪かったです。ネタがないのでいろいろ考えられて多分入れられたと思います。小金井子どもメッセのほうボランティアの育成や、いろいろな人の刺激になるという意味では合っていると思います。勉強会もやっていますし、子ども・子育てネットワークがやっているものですが、年に1回はやっているの、鈴木さんに聞いてみるとよいのではないのでしょうか。子育て関係のいろいろな地域活動をやっている方々の支援になるようなことをたくさんやっています。

濱松生涯学習課長 事務局から補足です。手話講習会をこちらのほうに入れさせていただき意図についてです。この手話講習会というのは、当然最終的な目標は共生社会の実現というところにあるのですが、ここに入れさせていただいた意図としては、ボランティアの養成支援という

項目でございますので、人材育成の視点を込めてここに入れてあるということと、またこの後33ページに「学びを活かす場の充実」というところで、少し似たようなものはあるのですが、この項目は学びを活かす人づくりの推進ですので、学んでいただいた手話を活かす人づくりというところを踏まえると、こちらのほうが適切ではないかというところで設定させていただいたところでございます。各事業は当然、ここに入っているからこれしかないということではなく、それぞれいろいろなところに少しずつ係ってきます。手話講習会であれば共生社会の実現にも係ってきますし、学びを活かす場の充実というところにも係ってくるのですが、この事業においてはかなり参加されている方も多いので、人材育成という視点を込めてこちらに置かせていただいているというところでございます。明確な意図があります。

小林委員 失礼しました。理解しました。

笹井議長 その辺について、北澤委員のご意見も踏まえて検討していただきたいと思います。  
他にどうでしょうか。

藤森委員 わからないところがあります。具体的な事業例というのは、今現時点である事業を振りわけて書いてあるのですか。

最所生涯学習係長 そうです。今現在実施をしている事業を中心に記載をしております。

藤森委員 わかりました。ありがとうございます。現状と課題の中の一番下の4行目、「このため、ボランティア育成や地域の学びの中心人物（コーディネーター）を育成するとともに、研修の充実や担い手の確保が必要です」と書いてあります。コーディネーターの育成が必要と書いてあります。それで29ページのところに、「コーディネーター的役割を担う人材を」と書いてあるのですが、YAサポーターというところで、サポーターはコーディネーターなのだろうかというところと、その後で「リーダーシップを発揮するリーダー的人材」とあります。リーダーはコーディネーターなのかというところ

で、僕はそこに違和感があります。リーダーシップを発揮する人というのは、上下関係では上に立つ人です。コーディネーターはつながりだけなので、その知識、技術はいりません。コーディネートする能力が高いということです。ファシリテーターもそうですが、回すのが上手ということです。つながりプロのコーディネーターを育てたいのであれば、つながりプロを育てるコーディネーターを育てるために事業が必要なのではないかと思います。ですから具体的な事業例はこれではないと思います。現状と課題の課題が「コーディネーターを育成する」だとすると、これではコーディネーターは育てないのではないという気がします。

笹井議長

コーディネーターとは日本語では調整役です。実は学校支援ボランティアさんのコーディネートもそうなのですが、全体がわかっていないとコーディネートはできません。学校の先生と地域学校支援ボランティアさんをどうコーディネーターがつながるのか、学校の先生が何をやっていて、地域のコーディネーターは何ができて、何ができていないのかということを知らないとコーディネートできません。つながりのだけれど、つないでそれを調整するというのがコーディネートだから、本当はYAサポーターさんにもリーダーさんにも調整能力というのが必要で、その意味ではコーディネーター的な役割というものを併せ持つのではないかと考えています。実はコーディネーターだけ単独で育成するというのは、これもすごく難しい問題です。コーディネーションというのは、状況が変われば、人が変われば変わるわけです。どのようにコーディネートしたらよいかは経験を積まないとなかなかできないところがあり、そういう意味ではサポーターさんやリーダーさんにももちろん新しい事業ができればよいのですが、今の事業にコーディネートの役割を担うような仕掛けというか、工夫をしていただいて、やってもらったほうが経験が得られると思います。

小林委員

コーディネーターという要望を出してしまいましたが、ちゃんと定義しないまま書いてしまったということですね。

藤森委員

そうですね。調整というのは、まさにそのとおりだと思います。例えばルールづくりをするときに、学校のブラック校則とかありま

すよね。あれは禁止、これは禁止というものです。でもコーディネーターはそもそも調整ですから、何でそれをそうしなきゃいけないかという、こういう理由があって仕方ないからみんなでこういうルールにしようということ、みんなにわかるように伝えていって、じゃあ仕方ないかというような調整をするので、対話をうまくまとめる人なのでやはり知識や技術はないといけないと思います。でもリーダーだと、こうするのだと決められてしまいます。コーディネーターとリーダーも違うし、リーダーとサポーターのどちらでもないと思っています。知識は必要なだけけれど、コーディネーターというものの存在が全部を知っているけれど、リーダーシップも発揮しないし、サポーターとしても動かないといったようなイメージがあります。

小林委員

今のマネジメントで、リーダーは俺についてこいではなく、サーバントリーダーと言われています。つなぎ役、推進役、もしくはエンパワーメント、要するに伴走して活動する人たちを活性化するか、そういう役割の人たちを地域にいろいろと育てていくという感じなので、つなぎ役とエンパワーメントする方は両方いると思います。それは1人の人でも別に構わないので、つなぎ役的な人、もしくはエンパワーメント、要するに伴走型、伴走する人、エンパワーメントは日本語でどういふのでしょうかね。そういう形の役割的な人を育てるみたいな感じでリーダーシップや、またコーディネーターは人によって受け止め方が揺れている時期です。今企業の中でもリーダーシップというと昭和のマッチョな人を思い浮かべる人と、何となくサーバントリーダーという伴走型のリーダーシップを期待する人と2つあるので、その受け止め方がみんな違うと思います。最近リーダーシップと言われていたものも細分化してわかれてきていて、キャプテンシップという言い方もします。要はスポーツだったら監督がいて、選手がいるとしたら、キャプテンシップは選手の中のキャプテンです。監督やリーダーとかの上からの人ではなく、選手の中で一番みんなから信頼されている人が発揮するリーダーシップがキャプテンシップです。コーディネーターする人は中間管理職というか、真ん中にいる人みたいな感じです。表現がよくわかりません。

笹井議長 一般的には、小林さんがおっしゃったのはファシリテーターだと思います。ファシリテーターがコーディネーターに近いです。

小林委員 ファシリテーターとコーディネーターは似ていますね。

笹井議長 事業名としてYAサポーターとかリーダー連絡会とかになっているのは、はっきり言うと古いです。でも事業名がついているから書いてはいるのですが、役割としてはまさにファシリテーションとかコーディネーションというところだと思います。その辺を、そういうのが大事なのだということを書いておくことは必要かと思いません。

池田委員 コーディネーターでよいと思うのです。ファシリテーターという  
と教育の分野だと先生が一方的に教え、みんなにしゃべらせるとか、  
そういうのをファシリテーターと言います

小林委員 受け止め方が違うのですね。

金澤副議長 舵取りと書いてあります。

池田委員 一歩下がって、生徒たちが主体になって学ぶ、それがファシリテーターです。教育上はそう言うと思います。コーディネーターとはまた違って、ここはコーディネーターでよいのではないかと私は思っています。

笹井議長 わかりました。社会教育士という新しい資格が令和2年度からできて、そのときのやるべき仕事というのは、ファシリテーション、コーディネーション、プレゼンテーションと文科省のホームページに書いてあります。学校というよりは地域レベルで、地域で活動する人たちだから何をするかというと、市民1人1人に伴走して、それをエンパワーメントするという意味で使っているのだろうと思いました。コーディネーター的役割や、ファシリテーター的役割というものをこの中につけ加えていけばよいと思います。今、フォロワーシップという言葉があります。フォロワーシップというものの中身がよくわからないのですが、リーダーにどのようなフォローを

していくのかということだと思います。ものの考え方、概念や言葉の使い方が今すごく変わってきていると思うので、そういう意味では事業名そのものの見直しや、中身の見直しが必要かと思います。今現在やっているという意味で例として書いてあります。必要性についてはもっと別のところで書くべきかと思います。

施策の2番について、他にいかがですか。

小林委員 小金井桜の活動ですが、市とは関係ないという認識ですか。学びを活かしていろいろやろうという感じで受け止めたのですが、それも検討の中に入っていてあえて落としたのであればよいとは思いますが、カードとしてはあると思いました。

最所生涯学習係長 32ページの「歴史、文化財、自然（みどり）」の中に、すべて具体的には書いておりませんが、一応含んでいるという認識です。

小林委員 わかりました。これで謳えているのであればよいと思います。

笹井議長 33ページまでのところで何かありますか。では、また後で全体を振り返るときにご意見があればお願いしたいと思います。次に、施策の3番目「学びとつながりを支える基盤の整備」です。34ページから37ページです。

渡邊委員 34ページの「基盤の整備」ということで、具体的な事例として「図書館、公民館、文化財センター、公共施設の予約システム」というような形ではあるのですが、基盤ということと考えたときに、例えば学校とか、そういうことはどこかにあるのですか。学校を利用した施策の広がりとか、学校を使わせていただいて、おやじの会があつたりしていると思います。校庭開放もそうですが、学校はこういうところには入れられないということなのではないでしょうか。

笹井議長 そんなことはありません。学校開放ということですか。

渡邊委員 そうです。教室や校庭も含めて、学校をもっと使っていこうということは流れとしてはあると思います。実際は学童のことでもなかなか難しいことはよくわかるのですが、学校を使っていくと自然と

子どもたちや、学校の近くにお住まいの地域の方々が参加しやすいということもあると思います。ここでは図書館や公民館というところが中心にはなるのですが。

笹井議長 34ページは、ハードとしての学校を考えていて、この機能を地域の市民にもお使いいただくということがあれば、30ページの地域学校協働活動や放課後子ども教室などのところかと思えます。

最所生涯学習係長 事務局です。施策の3については、基本的には基盤というところで、ハード面から捉えた社会教育施設の充実といったところで記載をしております。確かに委員がおっしゃるように、学校施設を利用した放課後子ども教室等は学校の設備を利用させていただいているので、その辺りもよりよくということはこちらも願っておりますし、そうなればよいとは思っているところです。施策の3について、学校の記載というところは、ここは社会教育施設に限ったというような認識がございます。

渡邊委員 わかりました。どこかに学校というものについての可能性や、そういったことが基盤と言いますか、利用する1つの施設として入ってきてよいのではないかと思います。どこかに入ったらよいと思います。

笹井議長 学校施設の整備というのは、また別の制度的な体系があるので、なかなかこの計画レベルでは難しいところがあります。

小林委員 コミュニティ文化課がやっている集会施設もリソースとしてはあります。集会所とか〇〇会館とか。小金井市は昭和40年代にそのような施設を建てて、老朽化してきていて、今整理していかなければいけないのではないかとということで、公共施設のあり方ワークショップを市民向けに開いたりしています。見直しはこれから進んでいくはずですが、そういったときに、そういうものも入れていかなければいけないと思うのですが、まだ決まっていないですし、そこはどうなのですか。公共施設のあり方の機能として何が必要かということをしらべたりしていくとか、検討していくというのは施策の展開方面としては書かなくてもよいのですか。

最所生涯学習係長 施策3については、社会教育施設という説明をさせていただきました。公共施設、他の集会施設等のあり方というところでは、企画政策課のほうで公共施設あり方検討委員会というものを設置しております。そちらのほうで基本的には議論があると思っております。生涯学習推進計画の中においては、公共施設のあり方まで言及することはなかなか難しいという認識でございます。

小林委員 わかりました。生涯学習課から企画政策課のほうに、こういう役割が必要だから、こういう機能を残してくれという感じで主張していかないといけません。この前も企画政策課の方がワークショップをやったのですが、公民館はこれからどうしていきますか、児童館はどうしていきますかと、そのような既存の枠組み施設ありきで議論を進めようとしていたので、これはまずいと思っておりました。地域にどういふ社会教育的な施設の役割が、機能が必要なのかということを考えないといけないのですが、そういったことに関して避けているというか、あまりそこにフォーカスに入っていないというか、スコープに入っていない感じが危機感を持っています。既存の事業をどうアップデートしていくかということの議論に終始しています。生涯学習課の生涯学習の計画をせっかくやっているのです、そういったところのあり方みたいなものを今後検討していったり、アンケートをしていったりということの施策は大事だと思っております。公民館はどういふ機能が必要なのですかと、児童館はどういふ機能が必要なのですかと、その機能が一緒だったら一緒にしてしまってもよいのではないかと、何が必要なのかという本質的なものをやらないで、施設の枠組みありきで議論が進んでいるところがあって心配しています。それはこの計画には入れなくてよいのですかというところの問いです。それを入れる必要はないというところでいくと、じゃあどこでカバーしていくのかというのはぜひ検討していただきたいと思っております。社会教育の会議の委員として意見を言わせていただくと、こちらは関係ないかもしれないけれど、生涯学習課としても社会教育の観点からもっと主張して行ってほしいということをおきたいと思っております。

笹井議長 ありがとうございます。公共施設というと、公共施設だから全部

の公的な施設が入ってしまいます。公共施設は市長部局もよく見直しをやるのですが、社会教育施設も入っています。概念設定がそうなので入るのは当然なのですが、こちらで社会教育施設の話、集会所や公共施設の話をする、縦割り行政になっていて生涯学習課の範疇を超えるのではないかという話によくなります。本来は公共施設と同じように幅広い概念で集会場も含むのですが、行政の仕組み上、生涯学習の分野のものは教育委員会の所掌になっているということに限られているので、その辺のジレンマがあると思います。計画である以上は、ある程度教育委員会と関連する施設だけではなく広がりがないといけないと思っています。方向性のところであり方を検討するということは書けるのではないかと思います。

小林委員 縦割りを唯一超えられる取組です。

笹井議長 そうですね。そこは検討させていただきたいと思います。

小林委員 堂々と縦割りを超えられるのはこの機会しかないなと思います。

笹井議長 そうすると、将来、市役所内の会議で他のことを書くんじゃないといった、余計なことですけどそういう話になることも考えられます。そういう心配がありますが、どこまでどう書けるかというのはおっしゃるとおりだと思うので、ご検討していただきたいと思います。

小林委員 多分、市長はそこまで気にしていないと思います。市長と教育長は気にしていないはずなので、リーダーが気にしていないのであればいけるとと思います。現場同士の軋轢があるかもしれません。

笹井議長 それでは、全体の1章から全部を通してお気づきの点がお願いします。ご指摘いただきたいと思います。あるいは疑問の点があればお願いします。

小林委員 評価のところの述べ人数は変えるのであれば今だと思います。市民アンケートを中心に、ゼロからやりませんか。いわゆる第4次から引っ張っている負の遺産を捨てて、評価を新しくつくりましょう。

延べ人数はやめましょう。それが1つと、Xのフォロワー数だけでは何も意味がないのでインプレッション数もちゃんと入れてください。

笹井議長 指標に関しましては案としてご提案ですので、範囲はありますが見直すということは当然前提でつくっております。それを踏まえてご意見いただければと思います。

小林委員 やめろというだけではなく、カバー数、その受益者の範囲がちゃんとわかるようにしたほうがよいです。要は一部の人しか受益していないじゃないかということが見えたほうが、どうやって広げていったらよいかということにつながります。痛みは伴いますが、伸びしろは大きいほうがよいと思います。カバー率でどう図るかということをご検討していただきたいと思います。延べ参加人数など「述べ」はやめましょう。特に人数です。人に関わるものに関しては延べ人数ではなくて、やったことがある人、関わったことがある人、参加したことがある人のカバー率です。それをお願いしたいと思います。

笹井議長 他にどうでしょうか。

小林委員 児童アンケートはすでにとってしまったのでしょうか。

最所生涯学習係長 基本的にこの計画に関して、アンケートは取っていません。子どもに関しての部分については、このために取りました。

小林委員 わかりました。次回から、ぜひ実態を見られるアンケートにしていきたいと思います。子どもの意見を聞くという意味合いで入れられたと思うので、今回はこれでよいと思うのですが、実態をわかる形にしないと、参加したいけれど参加していないというところが見えてきません。それだと問題も見えてきません。

笹井議長 他にいかがでしょうか。

小林委員 15ページの「0歳から始まる生涯学習」というところで、いき

なりPTAの思春期講座や家庭教育学級となっています。市民の実感からするとこれもないわけではないのですが、子育て・子育てネットワークがやっているいろいろな団体の取組や、お母さん向けのもをやっているんで、これはすごく無理がある表現になっているのですが大丈夫ですか。また、コロナがあったので、PTAはコロナの時代は全然やっていないはずで、そういうことも含めて、いきなりPTAが出てきて、高らかに謳うのはどうなのかという気もしています。それは1つ指摘しておきたいところです。子育て支援課の取組で、社会教育的なものもちょっと入れた上で言及したほうがよいのではないかという気はしています。特に0歳からとなっているので。

笹井議長                    ありがとうございます。どうでしょうか。他の方はよいですか。

鈴木委員                    小林さんと同じように15ページの家庭教育学級、思春期講座というところでお願いがあります。これはPTAから予算をもらって、保護者が企画、立案して実施する講演会やイベントなのです。なぜか謎ルールが残っていて、小学生が他の小学校に行くのは構わない、小学生が中学校に行くのも構わない、地域の人、保護者がどこの中学校に行くのも構わない、ただし、中学生に関しては他校の生徒は他校へいけないという不問律があります。それはなぜかと随分深掘りして聞いてみました。昔やっていた積み木崩しをご存知かどうか分かりませんが、少し古い話になります。変形学生服という寸胴の学生服を着ている子が学校の外で待っていて、要は喧嘩を申し込みにいくみたいな、そんなことがあるからいけないということが原点にあるのではないかという、馬鹿みたいなルールが残っています。ざっくりと印象を申し上げますと、予算はつけていただいたのですが、募集する方法というのは学びポケットか、もう少しやる気のある学校でクラスルーム、後はチラシを撒くぐらいしか方法がなく、現代の子どもたちや若い保護者に訴えかけるような募集の方法ではありません。そうすると、どこの学校でもすごく集まりが悪くて、以前どこかの学校で聞いたのですが、コンテンツにもよるのですが、ハンセン病の講演会をやりたい保護者がいらして、そのときはもうそのハンセン病の講演をする応募人数が1人というようなことがありました。いろいろな理由があって、募集しても人がこ

ないということで、去年初めてPTA連合会で全校に同じ内容のチラシを、学びポケットというP連メールで流していただいたところ、続々と応募がありました。去年、大熊教育長、講演、それからヨガのセットの講演だったのですが、最終的には74名の方の申し込みがあり、南中の前年の家庭教育学級の思春期講座の申し込み者数の5名を大幅に上回ることができました。今回、今週末ですが中学生向けの企画を立てました。小学生は3年、4年生が24時間、5年、6年生は35時間、中学生になると6時間しか本物の英語の講師と話す時間がありません。立川では英語の講師が常駐している学校もあったりして、そうすると廊下ですれ違ったりすると気軽に英語であいさつもできます。英語を毎日習って、それを使うチャンスが日常的にあります。こういうこともすごく大事なのですが、現実にも今、中学へいけないということで、実際その募集もかけられないですし、そのような謎ルールみたいなものも、このようなよいものをつくるのであればどんどん変えていっていただきたいと思います。なぜそんなことになっているのか教育委員会のほうでわかれば、次の会議で教えていただきたいですし、直せるものであれば直したいと思います。何のメリットがあるかという、各校に募集ができます。P連メールを使って流すことができると、より多くの人に保護者が一生懸命考えたよい講座を受講してもらえます。そこはなぜなのか、次の会議で教えていただきたいです。

笹井議長

ありがとうございました。鈴木さんのご質問について、次回お願いしたいと思います。

その他いかがでしょうか。よろしいでしょうか。更にお気づきの点がありましたら、事務局のほうにメールをいただければと思います。小委員会でもう一度検討させていただいて、案をつくって、最終的に教育委員会にご了承いただいて、行政の案としてパブリックコメントにかけるということです。小委員会の委員の皆様も検討する機会ありますが、委員の皆様も何かありましたらぜひメールでいただければと思います。

それでは最後に、1枚ものの紙があります。今回の計画について、キャッチコピーの提案があります。他に案があればぜひ出していきたいです。

小林委員

どうしても「学び」や「学習」という言葉は、特に我々のような昭和世代だと、詰め込み学校、講座を学ぶといった感じのほうに取ってしまうので、なるべくそういうイメージがつかない、もしくはそういう先入観を避ける表現のほうがよいと思っています。そうすると、「知りたいから始まるよりよい小金井」とか、要するに知りたいとか、好奇心とか、そういったものから学びって始まるんですよといった感じがよいと思っています。3か4かと思っています。ただ、どうしても「学び、活かし合う」というように「学び」が先にくるよりは、知りたいからつながるとか、最初に動機があった上で結果的に学びにつながるほうがよいと思いました。まちづくりにつながるというのは、3と4が強く出ているのでよいと思いました。5はざっくり過ぎているのでもう少し細かく説明したほうがよいと思いました。まちづくりというのはコミュニティづくりや、そういったものが意識されている部分は大事だということがあると、学びの先入観というものをなるべく柔らかいものにしたいです。知りたいとか、好奇心からとか、学び合うことでとか、そういうものがあったらよいと思います。

金澤副議長

私は案3がよいと思いました。理由は「生涯学習」という単語がありますし、私もこの社会教育委員になるまであまり注目できていませんでした。「生涯学習」という単語がもう少し広がったら、ハードルが低くなるような気がいたしました。それと、クリエイトする人生、小金井を創るというようになると、自分事と小金井市の両方が入っているので、案3がよいと思いました。

笹井議長

他にどうでしょう。

池田委員

私も「生涯学習」という言葉が入ったほうがよいと思います。つくった方には申し訳ないのですが、「未来のパスポート」はあまり好きではありません。アップデートだと思えば、案4が一番しっくりくると思っています。案1から案5までのいろいろなよい言葉を合わせてもよいと思います。「未来へのパスポート」は昔からないですか。

小林委員

若干強制感があるような気がしますよね。

池田委員 昔からあちこちで見たような気がします。

小林委員 アップデートやパスポートというと、改善しなければいけない、入手しないといけないといった圧力的な意味合いや雰囲気があります。

北澤委員 「生涯学習」という言葉は入ったほうがよいと思うのですが、「よりよい人生」とか、案1の「豊かな人生」というのは、何となく押しつけられている感があります。「人生」というのはよいと思うのですが、そこをあまり限定しないほうがよいと思います。「人生100年」はよいと思います。

小林委員 価値観の押しつけにならないようにということですよ。

笹井議長 他の皆さんどうでしょう。

鈴木委員 ある方から聞いたのですが、少しずつ自分の家の敷地を延長して何十年かたってしまうとそこが自分の家になる、土地になるという古い法律が残っているらしいです。おばあちゃんが1人で住んでいるところに、老夫婦が住んでいる家が植木を置いていってしまったそうで、何年も何年もたったときに、もうずっとうちはここを使っているからこの土地はうちのものだということになりました。結局そのときは弁護士を入れるという話になり、そのおばあちゃんの息子さんがきて問題を解決したのですが、私もう一回勉強するわと言って、小金井市がやっている法律の講座にくるとい人もいました。その人は別によりよくとも、より楽しくとも、より豊かな人生を送っていたわけではなく、必要に迫られて講座にいき、普通の講座にいこうと思ったらコストを払わなければいけないけれど、市がこんなによい講座をやってくれるのであればということでも法律相談を使ってみたり、法律の関係の講座にいったということもあります。切羽詰まってこういう講座にくる人もいるのだという事実を1つ紹介しました。だから、「未来へのパスポート」でもないし、「わくわくする未来」でもないという人もいますよという報告です。

北澤委員 「知りたい」から始まっていますよね。それはポジティブだったり、ネガティブだったりするでしょうけれど、動機としては「よりよいまち」が暮らしやすいのかなと思います。

笹井議長 ありがとうございます。次回の小委員会で最終的に案として決定をしたいと思います。今のキャッチコピーについて、何か言い足りない部分がありましたら、ぜひメールでいただきたいと思います。今日か明日ぐらいにいただければありがたいと思います。

今回、突貫工事で皆さんにはご迷惑をおかけしましたが、建設的なご意見をたくさんいただいて充実した議論ができたと思っています。ありがとうございます。先ほど申し上げたとおり、できるだけ皆さんのご意見を反映させていきたいと思っています。

事務局のほうから何かありますか。

最所生涯学習係長 次回、令和8年1月下旬を予定しておりますが、改めて決まり次第またご連絡をさせていただきます。1月12日に二十歳を祝う会がございまして、社会教育委員の方にはご出席を賜りたいと思っております。後ほどご連絡を差し上げますので、こちらのほうよろしく願いいたします。1月23日の予定はまだ調整中です。パブコメができるか、できないかも含めていろいろ調整をしていきたいということで、改めてということで。23日についてはまたご連絡を差し上げたいと思います。よろしく願いします。

笹井議長 ありがとうございます。それでは今日の会議はこれまでとなります。お疲れ様でした。

— 了 —